

武德編年集成

四十三
四十四

貼

庫	文	閣	內
四九函	三三二九號	五冊	和書類
三架			

(九廿九)

153
函

百九十二番

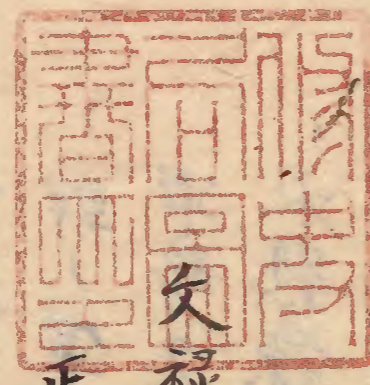
內閣文庫	
番號	和 33119
冊數	50 (29)
函號	149 113

共五十



152

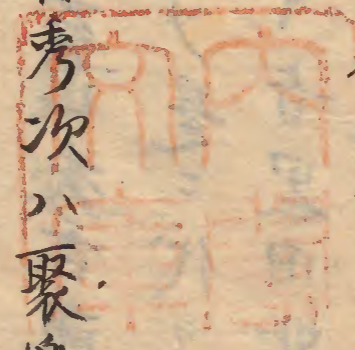
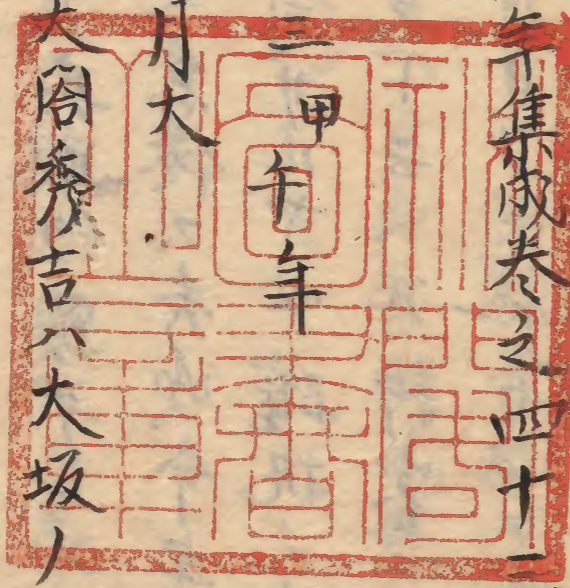
武德編年集成卷之四十二



文祿

甲午年

正月大



木村高敦 撰

豐臣大谷秀吉ハ大坂ノ城同関白秀次ハ聚樂
ノ城ニ召ケシ 台徳公ハ聚樂城外ノ御館ニ於

于新羊ヲ迎ヘ玉フ

五日 越後ノ参議上杉景勝後三位ニ叙ス

六日 秀吉和瓦多門ニ城ヲ築クト欲シ旧臘

監檢ノ使ヲ起シ玉フ処也僻ニメ洛陽大坂ノ往

未其便ヲ得サル由飯リ報スルユハ所ヲ城瓦伏
見ニ寃メラレテ群国ノ人夫未月伏見ニ集リ城
ヲ築クヘキ旨緒大名ニ觸ラレ此所以ハ天下ヲ
以テ幼息秀頼ニ譲ラント欲シ玉ハ臣関白秀次
謙遜ノ志曾テナカリシユハ大坂ノ城ヲ秀頼ニ
所属シテ其威勢顯サシメシ爲ナリ蓋シ秀吉朝
鮮ノ軍ニ怠倦ス秀次今年七七也何ゾ是ニ代リ
軍務ヲ司サルヤ必確執ノ基タルヘキ旨黒田如
水熟諫スト云ハ臣許容セス唯荒淫遊獵ヲ以テ
空シク月日ヲ送ルト云々

廿三日 江城當北七日ヨリ再經始ノ教令ア
リト云ハ臣秀吉伏見城築ノ觸アルユハ是ヲ止
ラルヘシト云々

二月大

四日 柳原康政カ亭ニ関ハ瓦ノ諸牧ヲ集メ
テ伏見經營ノ一ヲ沙汰シ當十六日人夫ヲ集シ
洛陽ニ赴クヘシト云々一万貫ノ高ニテ三百人
ノ役夫ナリ則辨供錢下行セラル既ニメ 神君
不日ニ御上京アリテ大坂ニ至ラセ玉フ惣ノ肥
前名古屋ノ城郭警備ノ外ハ皆大坂ニ群衆メ伏

見ノ城築沙汰ス

廿七日 秀吉ハ 神君ヲ初メ大小名ヲ携ヘ

一昨廿五日大坂ヲ発シ吉野山ニ往テ吉水院ヲ

假館トシ櫻花ヲ愛觀シ數日逗留遊宴ヲ尽サレ

侍臣數十人ノ外ハ守祿ノ士ヲ制セラレ諸人其

度量ノ廣ヲ折嘆ス

廿九日 吉水院ニ和歌ノ會アリ 神君ニ和

歌六首ヲ詠ス

是月 蒲生氏ハ上洛ニ関白秀次早ク朝鮮ハ

渡海アルヘシ氏ハ先鋒タラシ由諫ムレモ肯ス

氏ハ去年鎮西ヨリ飯京仲冬ニ及ヒ下国シ今又
参勤ノ秀次ノ遂ニ大同ト不和ニナリ眾ニ陷ラ
諫スル所ナリ

足利源頼氏大坂ニ至リ秀吉ニ謁ス亡兄四朝

ノ遺職ヲ賜リ左馬次ト称シ則野瓦喜連川ノ下

向ス

三月小

二日 岡東ノ諸士人夫ヲ率テ入洛ス于晚

神君芳野ヨリ未夕飯御ナキユハ旅宿ニ在テ勞

ヲ休マ

三日 秀吉紀瓦高野山金剛峯寺ニ登リ青巖

寺ヲ宿館トシ舞臺ヲ新夕ニ設ケ金春大夫ヲメ
張ホテ催シ衆徒ヲ慰メラル其半ナル吹サシモ
ノ晴天俄ニ乾ノ方ヨリ黑雲起テ震動雷電ノ疾
凡甚而車抽ヲ流スカ如ク貴賤皆魂ヲ失フ往昔
ヨリ弘法大師堅ク當山ニテ笛大鼓ヲ禁スヘギ
送戒アリト云ク秀吉高野山ヨリ遂ニ搦取兵庫
ニ赴キテ大坂ニ還入セラル

七日 伏見ノ城經始官監佐久間河内守政実
瀧川豊前守忠往佐友駿河守杉山主水水野毫之
外石尾与兵求治一竹中貞右赤門伏屋小兵求群

国ノ大夫七五万人ヲ集メ湟整ヲ鑿セ石壁ヲ築
ク或巨石ヲ醍醐山科比叡山雲母坂ニ擲シ或大
枅ヲ歧岨土佐ノ山中ヨリ伐出サシム

十四日 神君伏見ノ經營 台覽トシ 渡御
其事ニ預ル諸士謁ヲ執ルト云ク

十六日 松平甚右赤門正次卒又法諱清嚴淨
久ト号ス長沢ノ松平兵庫从清宗カ庶子右馬允
宗憲カ子ニシテ遠死今泉ノ産ナリ其子十キユ
大河内金兵衛久綱カ次男長三郎正久ヲ養子ト
ス後右衛門大夫正綱是也

十七日 秀吉伏見ノ城築シ見シ爲ニ大坂ヲ
榮ス

十八日 秀吉巡視畢リテ大坂へ飯ラレ

四月大

朔日 前田参議利家權中納言ニ任ス

八日 秀吉利家ノ亭ニ来臨其式慈照院義

政公細川右京大夫勝元宅へ渡御ノ記録ヲ考へ

是ニ准スルユへ古躰ニシテ殊勝タリ扈從ノ輩皆

騎馬ニテ馬帽子直垂ヲ用ユ利家父子ヨリ献物

数品早猿亦アリテ饗応羨ヲ飾リ佳肴珍味ヲ賜

スト云

廿九日 秀吉携瓦有馬ノ温泉ニ浴ス 神君

平岩主計及親吉ヲ以テ其快驗ヲ同ル

五月小

二日 秀吉大坂ヨリ伏見ニ至テ管搆ヲ監臨

セラル諸將ノ監吏ヲ召テ暑衣ヲ賜フ 松平家忠ニ毛暑衣

胆腹ヲ与
ハテラル

或日 神君ノ御方国豆及ヨリ海上ヲ歴テ

巨石ヲ大坂へ廻シ是ヨリ川船ニテ伏見ニ運

送シ石垣ヲ築カシメラル 然レモ遙々ノ海上

剝風波ノ煩アリテ光陰ヲ歴ルニハ 御當家
ノ業ク所他ノ諸候ニ劣レリ秀吉也視シ玉ヒ
表臺岐守勝信ニ向テ 徳川家ノ下吏其懈リ
アルコトヲ諱リ玉フ旨漸 高関ニ及フ 神君
尊慮ヲ惱サレ勝信私ニ秀吉倉庫ノ石ヲ暫ク
許借スルニ於テハ先是ヲ以テ石垣ヲ築キ其
間ニ豆瓦ヨリ石舟著津スヘキ間官倉へ返納
ヲ遂テルヘキ旨臺岐守ニ番錢セラル勝信カ
曰元來秀吉巨石ヲ貯ヘ置ルト是諸候經營ノ
功懈リアルトキ是ヲ以テ築カレ其息慢ヲ戒

ラルヘキ為ニ然ルヲ私ニ許借セシメシ最
モ恐レ入ト云ヘト 徳川殿ノ仰モ重ク難澁
スルニ君ヒサレ所ナリトテ總便ニ巨石ヲ暫
リカシ奉ルニハ 神君ノ奉行等余多人夫
ヲ以テ日アラスメ石垣ヲ築キ却テ其功諸候
ニ超テ速カニ成ル爰ニ於テ五ケ日過テ秀吉
再ヒ監臨セラレ進カ大家ノ經營ホト快キハ
十日アラスメ成功莫大ナリト甚々稱養シ
玉フ 神君是ヨリメ勝信并其子豊前守勝永
ニ厚情ヲ施シ玉フ処庚子閏ケ原ノ乱ニ彼父

子石田ニ与カシ遂ニ浪客トナル

五日 神君伏見ノ御假館へ秀吉喫茶ノ會ト
ノ未信終日御饗心善美ヲ尽サル是ヨリ秀吉伏
見ニ逗留シ城築ヲ監檢セラレ

十九日 神君伏見ヨリ聚乐ノ營ニ 飯御

七月大

十六日 於総列芦戸本多作左衛門重次入道
呈揚行享年六十八歳ニシテ卒ス

八月小

五日 寂上出羽守義光カニ男左馬外 千代十
三女孫

太郎 御家人ニ列ス 神君ハ名家ノ子ヲ以テ我

カ臣トスルユト始ナル由 御威不斜ノ 御諱

字ヲ賜リ家親ト称ス後称後河守是ナリ後日

台徳公ヨリ正足下ノ 内府ト入魂欣然ト由且

左馬助兼上喜悅ノ由 御自筆ノ尊翰ヲ授セラ

ル

十八日 越後参議彈正大弼景勝權中納言ニ

任ス

大坂本願寺門跡頭如往年紀元へ退隱ノ後事

ノ子准如ヲ愛シ是ヲ宗嗣トセシト 欲シ長子教

如ヲ蔑如ス顯如去々年壬辰遷化以來後室如春
尼教如ヲ廢シ准如ヲ立シテ一ヲ秀吉ハ新ハケル
処ニ是ヲ并サレ然レモ 神君ハ密ク教如ニ恩
摸ヲ施シ玉フ 後京六条ノ東
門跡是ナリ

是月 松前民ア太浦慶廣カ父若狹守季廣多
年其功ヲ積テ蝦夷カ島ヲ伐取ユハ秀吉ヨリ民
ア大浦ニ彼島ヲ賜リ且諸國ノ高船彼地ニ渡海
スル者悉ク慶廣カ下知ニ任スハシ 違犯セシメ
ハ其國至ニ達シ誅ヲ加フハシト 且東奥津野ヨ
リ大坂迄ノ間地陸道駅宿傳馬ヲ印章ヲ与ヘラル

九月小

十三日 卿家人逸見四郎左米門次率ス是
ハ元北条氏邦ノ麾下武足尾高ノ城主ト云ク頃
年 神君ニ社フ

十五日 大久保七郎右米門忠世卒ス享年六
十三也抑大久保ハ卿當家累世ノ功臣殊忠世
ハ 神君創業羽翼ノ臣ナリ長男治ア大浦忠隣
家督ヲ續テ相忍小田原ノ城主トシ其祿四万五
千石ヲ領ス二男ハ庄次郎忠基三男ハ四郎左米
門忠成 後年任
玄蕃及 四男ハ半右米門忠永ト稱ス且七

高右出門忠世カ弟七人アリ治右出門忠佐津城
至二大八高忠包旅友波新蔵忠寄旅味方原勘
万石旅大井七高忠正令戦死推右出門忠為甚右出門忠長彦
左出門忠孝ナリ其妹大河内善兵衛政綱カ妻ト
ナル大久保ノ宗領家此取ノ新八高康忠ハ則七
高右出門忠世カ従弟ノ其奈一族繁多ニ各真忠
ノ勲功諸家ニ銘越スト云々

十月大

廿四日 渡辺但馬秀綱五十八止ニシテ旅奥死
卒ス是人ハ八右出門系綱カ子母ハ小笠原三郎

左出門カ娘ナリ

十一月大

二日 秀吉備生氏郷カ取方ヲ訊ハントテ彼
亭ノ末駕セラレ諸牧ヨリ豫シメ奇貨珍器ヲ送
ル伊達政宗ハ錫子雙ヲ遣ス氏ハカ病症ハ名古
屋在陳中彼勇畧ヲ忌憚テ秀吉ヨリ毒飼ニ及ヘ
リ

廿三日 御家人曲淵庄左出門吉景卒ス樂ハ
武田信玄カ部將板垣信形カ驍士遂ニハ信玄勝
刺ノ忠勤ニ天正十壬午年以來 神君ニ属シ軍

功アリ関東卿入国ノ時甲凡旧領ノ替地トノ相
凡中村節ニテ五百石ヲ賜ル処ニ吉景カ末期ニ
至リ其遺職五百石ヲ嫡男彦助正吉ニ相統ス
シト云ヘ正吉天正十年以來其功ヲ以テ
是又坂東卿領國トナリシ取武臣録形ニテ百五
十石ヲ并受シ且卿感状迄賜フ此君恩一己ノ肩
目何ヲ以テ是ニ加シヤ父ノ遺領ヲハ分セ左
門助左門甚右出門ニ配分セン一ノ正吉強テ
訴望ス庄凡出門末期ノ歡悦大形ナラス正吉カ
請フ取ラ 神君卿許容アラニテ願フ肯送言

シケレハ 神君正吉カ御察白人志ヲ感シ父ノ送
領ヲ以テ貴三人ニ配分セラレ 慶長九年甲辰年三
月八十石ヲ正吉
ニ加恩
アリ

是年 神君ノ御娘 初ハ北条ヲ秀吉ノ妹也
以テ池田三左門輝政ニ嫁シ玉ノ母堂ハ鶴殿ニ
郎長持カ娘西郷殿ト云シ 西郷殿ノ甥鶴殿也
姫君ニ附屬シ其苗孫介 長忠カ子大隅長次此
ニ池田家ニアリト云シ 神君ノ庶子松千代凡
誕生○高木圭水正清秀致仕ノ相凡東郡海老名
村ノ領知ニ閉居ス今年汝男志广守一音ハ下野
守忠吉朝臣ノ附屬セラレ 初ハ水野下野守信元

和泉守忠重ニ仕ヘシ者ノ清秀カ家督ヲハ其三
男善次郎正次ニ賜リ五千石ヲ領ス正次取来所
ノ食邑千石ヲハ四男善三郎守次ニ賜フト云シ
小笠原兵ア大瀬美政カ嫡男幸松凡誕生ス母
堂ハ因崎三郎信康君ノ却息女ニ
幸松凡及信濃
守忠備ト稱ス
秋浦市十郎正友 正友市郎親
長男 始テ 神君ニ謁ス
于昨却弱ナリ正友
長男 〇菅谷左出門大夫範
ノ年ヨリ近習スト云ク
政上総ノ内平川村千石ヲ賜リ御家人ニ列セラ
ル是ハ常陸國小田天庵カ麾下信太郡ノ領主政
貞入道全然カ子ニ小幡源太郎正次 太郎丸弟門
正俊カ子

逸見左馬介友助 以上ニ人
坂東ノ士 建テ傳右米門正兵衛
家人ニ列セラレ此建テハ杖々木六角兼禎カ旧
臣江及建テノ城主箕作ノ城衛傳内賢文カ子ニ
天正甲戌兼禎落魄ノ後浪客タリシカ青蓮院尊
朝親王ノ筆蹟ヲ学ヒ翰墨ノ力ヲ兼ルニ一執筆
ヲ吏トナシ 神君江及御領知ノ内老曾村ニ於
テ五百石ヲ宛行ハル 〇肥前長崎ノ商者惣代ノ
内安東某嚮ニ去吉ノ願望ニ依テ内町ノ外在々
迄ヲ掌ラシメ地子銀二十五貫目ヲ收メ至ル集
ハ藝民村山ノ産ニシテ往年長崎ノ来リ筑前素

生ノ末次與善カ扶助ヲ得ル処雄辨ニシテ彼表ノ
人ニ引シ今般息過ノ命ヲ蒙リ東庵ト改ム
大和紀伊和泉三沢牧權中納言從三位豐臣秀
俊横死ス是人ハ秀吉ノ舎才權大納言秀長初稱
羽柴
是養
濃守糠子實ハ三位法印一路カ庶子ニテ當國
白秀次ノ連枝ト云フ無双ノ器人ニテ無科士庶
若干殺害スルノミナラス尙都猿沢ノ池法隆寺
堂前ノ池ハ往古ヨリ殺生禁斷分論ノ処ニ網ヲ
下シ魚ヲ得テ其所ニテ調味シ暴惡至ラサル
ナシ逐ニ癩疾ヲ患ヘテ吉野十津川ノ溫泉ニ浴

シケル折柄吉野川ノ上西川大滝ニ逍遙シ教十
丈ノ岸壁ヨリ下ヘ見小姓ニ苑苑キ旨下知スル
所ニ彼者懐ヘス苑薙リテ秀俊ヲ抱キナカラ深
流ヘ苑落テ共ニ微塵ニナル秀俊ニ未タ其子ナ
キユ一三ヶ目ヲ収公セラル通々相隨フ国侍ノ
内糞尾宮内少輔行奉十市常陸外布施左京亮ノ
ニ旧録ノ内醫命ノ地ヲ錫リ秀吉一直彥ニテ其
余四士給人皆浪宰ス然ルニ秀長ヨリ相傳ノ股
肱ノ臣友堂依渡守高虎此取髮ヲ薙テ高野山ニ
隠ル秀吉集カ武畧ヲ惜シテ頻リニ彼山ヨリ招

キ出シ東髪サセ 旧知二万石ノ上ニ五万石ヲ加
倍シ豫況今治ニテ七万石ヲ賜フ是庚子ノ役ヨ
リ 神君ニ忠勤ヲ竭シ難波ノ役ニ尚勲功ヲ勵
ス友堂和泉守高虎也 加考遠江守光泰ハ無刃
ノ勇將ナリ天正十八庚寅年以來甲斐國ヲ征シ
項年朝鮮國ニ渡海ニ號勇ヲ揮フ石田三成ト不
和ニテ朝鮮ノ西生浦宮ア兵アサ浦カ陳所ニ於
テ去々年壬辰ノ八月廿九日毒殺セラル五十七然
ルニ其子作十高貞泰今年ニ至リ僅十五也ニテ
甲斐國ヲ領スル一危フキ由石田是ヲ述ルニ依

テ秀吉甲斐ヲ除キ美濃墨野ニテ僅四万石ヲ貞
泰ニ授ケ甲斐一田ニ淺野彈正サ弼長政ニ賜フ
ト云々 服尸一節右取門保元 台徳公ニ仕
奉ル

文祿四乙未年

正月大

朔日 神君 台徳公氏ニ 聚楽ニ 於テ新年ヲ
迎ヘラル

四日 洛陽良醫翠竹院一溪道三享年八十三
也ニテ卒ス

二月六

七日 大坂ニ於テ参議後三位行飛彈守友原朝臣氏卿享年四十是ニノ卒ス兼テ秀吉彼勇畧ヲ忌ニテ天下ヲ奪フノ志アラシトシ疑ハル氏卿是ヲ察シ朝鮮圍平均セハ是ヲ賜リテ秀吉ノ先鋒トシ大明四百余ヲ征セン由一箇ノ訃牒ヲ整ヘ答ニ納メ未タ歎スルニ及ハス氏以没後秀吉是ヲ披閱アリテ嚮ニ毒飼セラレシト甚タ悔玉ヲ

廿日 神君ノ駿士永井傳以節直勝千石五秀

吉ノ命ヲ受テ後五位下右近大夫ニ任叙シ且豊臣ノ姓ヲ授テ直勝ハ長久手ノ戰ニ秀吉方ノ謀將池田勝入ヲ討捕シ其勇ヲ賞スル所ト云ハ裁ニ英雄ノ心ヲ攬ト云フ者カ

廿八日 秀吉牛車ニテ聚示城下 神君ノ郎

館ニ来臨供奉皆直岳ヲ著ス 神君ヨリ長老ノ

太刀光忠ノ刀行光ノ服差良馬一匹深氣白銀三

十枚則三万美服百領此内唐織八丈嶋五百端襪白銀三

三百端 台徳公ヨリ太刀一腰馬一匹白銀五百

枚時服五十枚越後布百端 傳通院殿ヨリ黄金

十枚時服十尺結城廿将秀康朝臣ヨリ時服三十
尺及 神君ノ御家人十萬貫以上ノ輩時服二十
尺三萬貫二萬貫ノ族時服五尺五千貫ヨリ二千
貫迄ハ時服或ハ三尺或ハ二尺ヲ欲ス響忘ツ美
不及筆紙ニト云

五月小

三日 神君御飯田ノ為 聚楽ヲ奏シ玉フ晚
ニ 台徳公ノ戒諭ノ日秀吉秀次ノ間必ス錦揃
ナルニ其時ハ必ス大岡ニ屬メ背クナカレ
ハニ大岡若クハ凶ニ罹ラハ御速カニ大坂ニ往

テ大政所ヲ守護スヘキ旨ナリ又久保忠隣等側

ニ在テ是ヲ圖ト云

是月 奥平九八郎家昌

テ晚十六年ナリ信昌カ長子大膳大

夫從五位下ニ任叙ス其才忠七郎 台從公ノ御

前ニテ首服ス 御諱字ヲ錫リ忠政ト稱シ且景

光ノ服差ヲ拜受ス

養子トナリ日七壬寅松平

氏ヲ錫ル松平守任日十九甲寅三十五少ノ年其子亮
源守定隆二十五生ノ寛永九年壬申早世家漸絶ス

六月大

十日 下総古河ノ居城ニ於テ小笠原右近大
夫貞慶卒ス享年五十七信及深志ノ城至大膳大

夫長岐カ三男タリト云一正嫡トナル先達テ
貞慶病惱アルユ一退隱シ其子兵ア少帥秀政古
河ノ城地三万石ヲ相編ス

秀吉諸國ノ田畠悉ク檢地シ余分ノ賦税ヲ収
公セラレキ旨命アリ勢列十三郡ハ羽柴下總
守勝雅岡本下野守宗憲朽木河内守利綱稻葉兵
庫及通麩版ア采女正一柳右近大夫新庄東王奇
其下ヲ沙汰シ各田畠ヲ檢地シケルカ先達テ
西太神宮ノ御神札ヲ悉ク勘落セラレ、処ニ剩
一相殘ル宮川ノ内四十ヶ村ヲモ檢地ヲ遂ント

ス然ルニ西洞院家ノ尼考藏全カ膝ヲ枕トシ秀
吉睡眠セラレ、処 神慮殊ニ憤ラセ玉ヒテ檢
地スヘクシハ命ヲ断ントノ冥夢ヲ蒙アリ覺メ
テ後編身汗水ニナリテ大ニ驚キ急ニ羽書ヲ勢
列ニ飛ハセ其下ヲ止メラル是ニ於テ神官等四
海一統ノ檢地御神札ノミ其沙汰ナキ謝礼トシ
黄金百枚ヲ献スル処是ヲモ速カニ返サル是ヲ
以テ後世ニ至テ彼四十ヶ村ハ穀高ノ沙汰ナシ
ト云々蓋 本朝諸國一統ニ檢地ト云フ一ハ往
古ヨリ曾テナシ文祿四年ノ檢地高下末代ニ稱

スルハ此時ノ改メ出ス所ヲ指テ云フナリ

七月小

三日 當関白秀次ハ木下武亮入道一位法印

一路カ子ニメ其始ハ大関秀吉ノ妹ナリ 京都村雲ニ位

トス 初三好山城守康長入道笑岩カ養子

ノ河尻若江ニ任シ其後又宮部善祥坊法印桂俊

カ粮子トナリ遂ニ秀吉ノ嗣子トメ博陸ノ職ニ

至リ枳尾濃江四ヶ国ヲ領シ榮幸ニ誇ルノ余リ

殘存暴虐ニシテ諸人唇ヲ齧シ殊ニ大関ノ冤臣石

田増田大ニ憤リ會ニテ色々譏問ヲナシ刺一裁

逆ノ企アル由言テ巧ニ述ケルハ秀吉是ヲ信シ

今日石田治ア少輔増田右衛門尉及富田左近將

監知信前田德善院法印玄以宮子善祥坊法印桂

俊ヲ以テ聚楽ニ遣シ関白秀次ノ叛逆ヲ紀問セ

ラル秀次驚テ急ニ吉田侍從兼治ヲ招キ七枚繼

ノ誓状ヲ調進ス於是秀吉ノ疑ニ聊カ散スト

四日 木村常陸介宣茲ハ秀吉ノ老臣隼人カ

子ニメ初隼人ト云シ昨ヨリ武名籍甚タリ且

父ニ襲テ政務ヲ執ト欲スル取石田増田ニ詔

越セラル工ハ秀吉ヲ恨シ近歳関白秀次ニ親灸

ス當晩ハ淀ニ在テ堤ノ下ヲ沙汰シケルカ女與
ニ乘シ忍ンテ聚ホニ至テ秀次ノ寢殿ニカキ入
サセ閑詰移刻夜更テ飯ル兼テ石田増田ハ木村
カ許ニ間者ヲ入置ユハ此下ヲ聞テ忽秀吉一達
ス

五日 黎明秀次 台従公ヲ虜ニシ是ヲ質ト

セント欲シ聚ホノ城下 神君ノ御館ニ人ヲ遣

シ今朝餉ヲ以テ享スヘキ間 台従公渡御アル

ヘキ下ヲ請フニ時土井甚三郎利勝 後大炊及 是

ヲ察シ速カニ答ヘテ曰東方未明 黄門寢室ニ

アリ日出ルニ及ンテ披露スヘシトテ使節ヲ返

メ後ニ大臣大久保治ア大捕忠隣 後任相 等督議

シ 台従公ヲ伏見ハ渡御アラシメシトスニ時

大路ヲ歴玉フヘキカ 竹田ノ間道終ルヘキカト

余議區々ナリシガ利勝カ口今微行ト云フ臣往

テ往玉ヒ追手来リ恙アラハ後代ノ朝ナラシム

路ヲ歴玉ハシト然ルヘシト云ケレハ利勝等僅

七人ヲ供奉トシ大路ヨリ伏見ノ邸ニ至リ玉フ

此間秀次ノ使来リ頻リニ 御光駕アラシムヲ

請フ大久保忠隣是ヲ會釈シ既ニ伏見ニ着御ア

ラシ頃ニ及テ 黄門君喫茶ノ約束アリテ今晚
伏見ニ赴カル由ヲ答フ秀次大ニ臍ヲ啞ム 台
從公ハ伏見ニ至リ玉ヒ大浴ニ謁セラル 処直ニ
新田殿ノ子也ト大ニ感セラレ兼テ秀次歎歎逆ニ
ハ非サレ厄諸將ノ金銀ヲ貸シテ其心ヲ攪ノ
ニ冰ス朝鮮渡海セスノ遊獵ノ地ノ諸將ヲ携ヘ
甲冑ヲ持シム其上自江備後守成定ヲ以テ毛利
輝元カ方一向後入魂ノ盟ヲ所望シ其草藁ヲ遣
シケルヲ輝元ヨリ今日是ヲ秀吉ハ歎シ彦好臣
ノ讒諛盛ニ成テ秀次罪ナリハ伏見ニ来リ

是ヲ謝スヘキ吉堀尾中村山内且宮戸前田西法
印尾孝祐主ヲ以テ下知セラル干收秀吉再ヒ堀
尾帶刀ヲ名テ秀次汝等カ勸メニ忘セス伏見迄
来ラサル時ハ奈何セシ吉晴カ曰君心ヲ勞スル
ヲナカシ 吾既ニ聚ホニ赴クヨリ必死ニ決ス秀
次君命ニ忘レ玉ハサル昨ハ吉晴則秀次ト厄
死スヘシ秀吉大ニ悦ヒ吾汝カ命ヲ乞フテ既ニ
三ヶ度汝カ忠誠比倫ナキ由ヲ移ス五使聚ホニ
至ル秀次是ヲ聞テ其心決セス時ニ其臣吉田修
理亮斯波武
場廣流拾石芥川ニ墜ラ築カシメケルカ五

使至ル下ヲ聞テ急ニ馳テ聚楽ニ赴キ秀次ニ謁
シ君叛心実ナラハ伏見ニ往テ十カレ爰ニ在テ
使節ヲ以テ陳謝シ玉ハ若クハ大浴許容ナリク
ハ一万ノ兵ヲ臣ニ附属アルハ不意ニ伏見ニ
発シ一時ニ勝敗ヲ決スハト諫ム秀次是ヲ聽
スノ伏見一赴ク処秀吉城中迄入ス木下大膳亮
直之カ宅ニ居ラシメ次ノ檄ヲ東武ニ馳テ
神君一因自逆謀露顯ノ由ヲ告ラレ

八日 秀次ヲ高野山ニ詣セラルル則秀次薙髮
シ伏見ヲ登シ此夜玉水ニ宿ス密々是迄供スル

所兵二三百ニ及フ秀次ノ寵毒二十余人ヲ今夜
徳永式ノ郷法印壽昌カ亭ニ移シ徳善院并田中
兵尸少浦吉政カ人数ヲ以テ紫ニク守ホス

九日 秀次玉水ヲ登ス馬上二十騎歩卒十人
ノ外扈從スハカラサル旨木下大膳亮下知セシ
ム是石田カ密意ヨリ出ルト云々今夕秀次尚都
井上源五カ家ニ止宿ス

十日 秀次高野山青巖寺ニ至ル

十一日 秀次ノ妻子ヲ丹波龜山ノ城ニ遣ス

十二日 五奉行ヨリ高野山木食與山聖人ハ

秀次ニ生害ヲ勸ム一キ旨ヲ告ル爰ニ於テ滿山
衆議ヲ凝シテ是カ死ヲ省ント欲シテ果サス

十四日 秀吉ノ飛書武江ニ浙ク到来ス則

神君御上洛アル一キ間魁首柳原式ア大將康政
早速路次一出陣ス一シト云シ未ノ刻其 命館
林ニ至ル処康政夜中ニ兵ヲ催シ明曉天ニ出勢
ス一キ由ヲ館内ニ解催ス康政良材ノ誉アリテ
武備常ニ整フ工一十万石ノ從軍夜中悉ク鞏足
ノ儲ヲナスト云

十五日 秀吉ノ檄使福島左衛門大夫正則福

原右馬外直高池田伊与守秀氏高野山ニ至ル秀
次ノ扈從山本至殿外十八不破万作十八尾山
田三十郎十六先達テ自殺ス秀次躬ツカラ
外錯十六之圓次ノ服差ヲ以テ自裁セラル享年二十
八七七ナリ松尾尼カ崎ノ住人荏ア路路守重政備
瓦兼光作波游ト云口ヲ以テ秀次ヲ外錯十六之刻右
ノ国次ノ服差ヲ以テ重政生害ニ及一リ東福寺
尚昌院西堂虎岩玄隆旦履多者松若殉死ス今日
柳原康政館林ヨリ類リニ兵ヲ進メ薄暮ニ高坂
ニ着シテ算糧ヲ食シ終夜押行

十六日 秀吉ノ三使夕日ニ及ンテ秀次ノ首
ヲ伏見ニ献ス然レ其首ヲ見玉フキヤ否ヲ
伺フ秀吉與山ハ奈何セシヤ最モ情ナキ由ヲ宣
ヒ首ヲ見スノ與山ヲ此以後疎ンセラル秀次ニ
同意スル木村常陸介ハ松尾五ヶノ在大門寺
自殺ス秀次ノ臣白江備後守成定初孫孫洛陽四
條貞安寺ニ自殺シ其妻ハ四條ノ道場ニテ自害
シ熊谷大膳亮直之ハ嵯峨ノ二尊院ニテ自害シ
栗野木工介ハ栗田口吉水ノ邊鳥居小路カ亭ニ
自殺シ日比野下野守山口少雲ハ北野ノ邊丸毛

不心ハ相國寺ニ自殺ス此日黎明柳原康政相良
平塚ニ至ル 神君江城ヲ御首途神奈川ニ御止
宿アルユハ康政平塚ニ扣ハ畢ン又

十七日 神奈川ヲ發シ玉フ平塚ニテ柳原康
政拜謁ス迅速ノ發向大ニ御感ヲ蒙フリ小田原
ニ進ム 神君ハ友次ニ御止宿爰ニ一日御滞留
後陣ヲ待セ玉フ

十九日 神君小田原ノ城ニ着御

廿日 三嶋ニ着御ノ処伏見ヨリ秀吉ノ羽書
来テ秀次生害ニ都鄙安全ノ旨ヲ告ル

廿一日 今日ヨリ行程ヲ益シ島田ニ着御

廿二日 吉田ニ至リ玉フ

廿三日 石アニ着シ玉フ

廿四日 直ニ伏見ノ城ニ至リテ秀吉ノ謁シ

玉フ処迅速ノ御上洛ヲ歡ハル、一斜ナラス、

具ニ秀次ノ罪状ヲ語玉フ

晦日 秀次ノ息男子一人及一ノ墓菊亭右府晴季公ノ

姫君三佐子比野松梅院娘辰局山口サ雲娘是

今房寂上娘ヲ始是公達ノ母堂弔女子ノ母堂三條

河原ニ於テ誅セシメ其死骸ヲ冨墓ニ埋メ石ヲ

建畜生塚ト称ス石田増田是ヲ奉行ス秀次ノ臣

一柳左近將監ハ 神君ノ預リ玉フ服ヲ赤女正

幣別松坂ノ城ハ上杉景勝ノ渡瀬左門依詮繁ハ佐

竹茂宣一明石左近大夫則實ハ小早川隆景ノ前

野但馬守長康ハ中村一氏ハ是ヲ預ケラレ後日

ニ皆死ヲ賜フ木下大膳亮荒木志平守元清入道

宗忠延壽院玄朔紹巴法格ハ配流セラレシカ後

日ニ免許アリ又聚楽ノ城ヲ破却シ秀次ノ殿舎

ヲ利家白玉フ其外諸候諸士ノ家屋ヲ毀テ伏見

ノ城下ニ移ス此時利家語テ曰秀次ノ叛心ハ偽

リナラシテ營中ヲ毀ツ處ニ不淨取ノ張付金ヲ以
テシ蓋クテ極秘色ヲナス堂大衰ヲ思フ者如是
ナラシヤト云々淺野彈正廿彌長政ハ蒲生秀行
幼少ユヘ會津ヘ下向シ政務ヲ沙汰シケルカ秀
次逆心ノ告アルユヘ岩手山城至伊達左京大夫
政宗ト氏ニ夜ヲ以テ日ニ繼テ伏見ニ至ルテ既
其路次ヘ告来リケルハ寂上出羽侍従ハ其娘ヲ
以テ先年秀次奥刃在陣ノ間是ヲ欲シ其毒トナ
ス所縁ヲ以テ秀吉是ヲ憎マル、上ニ石田三成
カ謀計ニ乘ラシ聚楽ノ私亭ニ篋居セシムル一

入太閤ノ怒リ甚タシ政宗モ羞光カ甥ニテ内々
秀次ト一味ノ由譏問アルニ依テ太閤ノ憤等閑
ナラスト云々於是政宗ハ太閤ノ電遇厚キ施茶
院ト入魂ユヘ先火坂ノ施茶院亭ニ蟄居ス時ニ
秀吉ヨリ徳善院寺西執後守岩井丹波守ヲ以テ
政宗方ヘ洛外ノ諸山ニ秀次五三日宛遊獵ト稱
メ止省隠謀ノ企テ昏疑スル刻政宗毎度相從ヒ
行ケル由其實否ヲ問ル政宗カ曰臣カ從者栗野
友八節非法ノ羞アリテ誅セントスル處ニ遂電
メ小圃ト云城ニ走リ城主上ア山民アカ陪臣ヲ

質ニ取テ然後ニ至リ遂ニ上京シ秀次公一仕ハ
甚夕電遇セラレ木ユ及ニ任シ剝ハ毎批嚴命ア
リシユハ政宗口惜クモ彼眾ヲ宥メシカハ栗野
大ニ先非ラ悔テ是ヲ價ニ謝セントテ厚ク執ス
ルヲ以テ秀次公頃年臣ヲ哀憐セラレ所シ乞及
叛心ノ企ニ列セサル者ヲ述ル又太閤ヨリ汝飯
國ノ初秀次ヨリ恩賜アルノ圖ハアリ分明ニ申
披ヘシトアリケレハ政宗甚夕赤面ス臣暇ヲ乞
ハシ為ニ秀次ハ同公シ飯宅ノ刻栗野以テ鞞十
口惟子北襲ヲ賜フ由ヲ述ル三使ノ曰是政宗ノ

極運ナリ嚮ニ是ヲ演達ナキユハ太閤ノ怒リ甚
クシカレハシトテ飯桑シ此旨披多シケレハ果
ノ憤激斜ナラス政宗ヲハ左遷セラレハシ然レ
凡其子兵五郎ヲ四老ノ叱ヨリ秀次ノ近臣ニ獻
シ至ユハ家督ハ兵五郎ニ宛行フハキ間早ク家
中ノ有司ヲ召登セ向後政宗ニ通路セスノ兵五
郎ヲ主君ト仰クハキ誓盟ヲナサシムハキ由ヲ
嚴旨ヲ蒙フリ政宗誓居シ怒ヲ懷ク頃伏見ノ城
下台従公ノ御館ノ前ニ高札ヲ建ル城築ノ奉
行ノ内伏屋小兵衛杉山主水竹中貞右衛門是ヲ

取直テ秀吉宮作シ巡視セラル折柄披露スル処
其札ニ日竅上伊達謀叛シ秀吉ヲ亡シ西三十三
ヶ園ヲ羨光是ヲ依シ東三十三ヶ園ヲ政宗依ス
ハキ企有ノ由ヲ記ス秀吉ノ口是兩家ヲ憎ム者
ノ奸計ト見ヘタリ秀次ニ阿黨スルト云ヘルモ
如是輩カ偽計ニ起ルヘシトテ右ノ三使ヲ以テ
忽政宗及竅上カ罪ヲ宥メラレ其上ニ兩家ヨリ
黃金二十枚宛ヲ出シ京伏見ニ屬託トメ掛至其
者シ辨人スヘシト高札ヲ建ヘキ旨下知セラル
則兩家ヨリ黃金ヲ掛至屬託ノ外尚望次ヲ訴人

ト
ニ似知可授之旨札ニ顯シケルカ遂ニ訴ヘ出ル
者ナカリシト云ク長岡越中守ハ秀次ヨリ拜借
金ノ下ニ依テ罪ニ陥ントシケレリ神君是ヲ
救ヒ玉フ武征安民記ニ載ルイニ秀次ニ阿黨ス
ル旨其判形アリ書牒ヲ石田三成カ臣芥川茂介
是ヲ捧ク石田此ヲ増田ト議メ是ヲ秀吉ヘ披
露シ幸長宅地伏見ノ城大手ノ門前故西人カ兵
ヲ築シテ郭門ヲ守護シ幸長ハ勿論其父彈正少
弼長政氏ニ誅セント乞フ爰ニ前田利家ハ最初
幸長ヲ聳トシ其娘死別スト云ヘ凡旧縁ヲ忘シ

取直テ秀吉嘗作ヲ巡視セラル折柄披露スル処
其札ニ曰最上伊達謀叛シ秀吉ヲ亡シ西三十三
ヶ國ヲ爰光是ヲ依シ東三十三ヶ國ヲ政宗依ス
ハキ企有ノ由ヲ記ス秀吉ノ口是西家ヲ憎ム者
ノ奸計ト見ヘタリ秀次ニ阿黨スルト云ヘルモ
如是輩カ偽計ニ起ルヘシトテ右ノ三使ヲ以テ
忽政宗及最上カ罪ヲ宥メラレ其上ニ西家ヨリ
黄金二十枚宛ヲ出シ京伏見ニ属託トメ掛至其
者シ辨人スヘシト高札ヲ建ヘキ旨下知セラレ
則西家ヨリ黄金ヲ掛至属託ノ外尚望次方訴人

ニ依知可授之旨札ニ顯シケルカ遂ニ訴ヘ出ル
者ナカリシト云ク長岡越中守ハ秀次ヨリ拜借
金ノ下ニ依テ罪ニ陥ントシケルヲ神君是ヲ
救ヒ玉フ
野幸長モ秀次ニ阿黨ス
ル旨其判形アリ書牒ヲ石田三成カ臣芥川茂介
是ヲ捧ク石田此下ヲ増田ト議メ是ヲ秀吉ヘ披
露シ幸長宅地伏見ノ城大手ノ門前故西人カ共
ヲ殺シテ郭門ヲ守護シ幸長ハ勿論其父彈正少
弼長政氏ニ誅セント乞フ爰ニ前田利家ハ最初
幸長ヲ聳トシ其娘死別スト云ヘ凡旧縁ヲ忘シ

不然毛利家カ館ハ浅野カ宅地ノ向フタルユ
密々露路門ヲ開キ浅野父子ヲ招キ其トシ紀シ
問フ処ニ彼父子カ曰吾家石田増田ト怨ヲ結フ
是ニ依テ彼讒詐ニ陥ル由分明ニ答フ利家即登
城メ眾ナキ良臣ヲ猥リニ刑セラレシト公ノ誤
リナルヘキ旨吉ヲ諫メ遂ニ僉議セラレニ至
レリ抑芥川友介ト云フ者ハ元砥谷六之介ト稱
シ幸長カ執筆ナリシカ故アリテ出奔シケルヲ
兼テ石田ハ浅野ヲ深ク憎ムユ忽嗾リ召抱ヘ
此ヲ以テ奸計ヲ行フ媒トセシトス芥川常ニ幸

長カ判形ヲ知ルユ其謀書ヲナス旨其才砥谷
某幸長カ是ヲ訴フ其上幸長常々毎月上中下ノ
旬ニ依テ判形ノ点ヲ密ニ替ルト云ヘ此友介
ハ是ヲ知サリケレハ幸長彼謀書ヲ一覽シ其点
ノ旬ニ応セサルヲ辨シ幸長カ平日他ニ送ル
書牒ヲ以テ證トセシトス吉是ヲ集メ紀ス
果メ其判ノ点相違シ芥川カ謀書ニ窺リテ渠
ヲ幸長ニ賜フ幸長怒眉ヲ開キ伏見者ノ表邊ニ
碓ニス抑信長ノ弓ノ士ニ尾刈津島ノ住人浅野
亦右衛門ト云フ者アリ其姪ハ吉ノ正室政所

殿是ナリ政取ノ兄ヲ木下肥後守家定ト稱ス政
所ノ姉ハ其名ヲ眞ト稱シ淺野長政カ毒トナル
法輝ヲ長成院ト云フ然レニ依テ淺野幸長ハ政
取ノ甥ナル故石田カ邪詐知是ユ一政所疎ニ石
田ヲ恨ミ諸人皆是ヲ憎ミ誘ラスト云フ一ナシ
然レニ秀吉ハ日々ニ三成ヲ寵遇厚シト云シ
是日 山口勘兵衛直友始テ 神君ニ仕フ

九月小

十七日 秀吉其愛毒淀殿ノ妹ヲ以テ養女ト
シ 台従公ニ嫁シ玉フ實ハ江北ノ氏全淺井備

前身長政カ娘ニテ母堂ハ織田信長公ノ妹ニ此
姫君初ハ丹波少將秀勝ノ簾中タレ起秀勝今年
早世ス一即 台従公ニ再嫁アリ

十月小

九日 御家人眞平監物貞勝入道々文卒ス享
年八十四也美作守信昌カ祖父ナリ

是秋 神君ノ御慶子仙千代君誕生母堂ハ清
水加賀守宗清カ娘ニ老臣平岩主計以親吉カ家
ニ養育ス此君遂ニ早世セラレ 後ニ亦五郎太君
ヲ以テ親吉カ子ニ准セラレ

十二月大

十七日 秀吉朝鮮征伐其功ヲ遂サレテシ憂
ヘテ神功皇后ノ佳例ヲ尋子ラレル処ニ松浦法印
鎮信カ曰其取豊前阿蘇山ニ於テ健雷神傳来ノ
豊治射法皇后躬ツカラ一七日修行セラレ名々
ノ神愛アリテ吳滅シ一瞬ノ間ニ從ヘテシ飯朝
ノ後其矢宇都宮家ニ傳ル由ヲ述ル秀吉先七豊
前ノ城井屋形朝房カ旧臣兵友伊勢芳賀四郎右
衛門ヲ召テ尋ラレル処ニ其射法ハ嫡家唯授一人
ニメ朝房ニ至テ絶タリ其御矢ハ先代故アリテ

久我家へ預ケ由ヲ達ス爰ニ於テ朝房父子ヲ
一朝ニ滅サレシ一秀吉大ニ後悔セラレ彼御矢
ハ久我家ヨリ是ヲ傳玉フヘキ由沙汰セラレ
是年 後友長八郎忠直十二世ニシテ 台従公
へ奉仕ス忠直祖父ハ薩忍ノ任島津相摸守忠幸
カ庶子長徳行ト号スル僧ノ遠ク下野足利ノ学
校ヲ志シ坂東ニ赴キケルカ遠忍今切ノ渡ニテ
暴風舟ヲ破リ書籍金銀ヲ失ヒ小舟ニ乗テ這々
後忍ニ至テ今川氏親ニ扶助セラレ別還俗シ後
ニハ兵学醫術ヲ業トシ小田原ニ至テ北条氏康

ニ登用セラレ永祿年中ニ戦死ス其長男芝辨法
仰武石浅草寺梅園院ニ任シ芝長十四巳酉七十
八文ニシテ寂ス
次男島津右兵衛門永久ハ遠山氏ノ姻家トシ江戸
ニ任シ長湊合戦ノ時氏康ノ馬前ニ於テ敵長尾
勢ト戦ヒ死ス三男左兵衛門四男隼人任ニ北条家
ノ精兵タリ後安房ノ里見ニ仕フ五男源左兵衛門
忠正ハ五女ノ配小田原ヨリ駿只ニ至リ後若少
林カ娘子トシ後若少氏トシ今其子長八郎御家
人トナル後孫本姓島津ニ復シ
八郎右兵衛門ト稱ス
奥平大膳大夫家昌神君御
外孫 従四位下ニ叙シ侍

後ニ任ス○伊達政宗嫡子兵五郎従五位下遠江
守ニ任叙シ秀吉ノ諱字ヲ賜フ秀宗ト
稱ス 是ヨリ秀
宗永ク秀頼ニ仕ヘケレハ関原乱後父政宗ニ男
虎菊丸ヲ以テ家督トシ後ニ裁前守忠宗ト云フ
ハ是ナリ然レモ秀宗ニハ芝長十九甲寅年ノ冬
神君ヨリ豫足宇和島十万石余ヲ賜リ別家トナ
ル 台徳公ノ近臣小幡勘兵衛景憲故アリテ道
世ス○江尾佐々木家ノ浪士因从孫一節一吉孫
三
吉政 御家人ニ列セラル○山口半左兵衛重勝初
清
稱ス 享年四十九歳ニシテ卒ス尾花愛知郡ノ産ス

○鈴木市兵沐政重享年七十三号ニノ卒又参見
足女ノ産ナリ

武徳編年集成卷之四十四

木村高敦 撰

慶長元丙申年

正月小

中旬 秀吉東国ノ諸候ニ命シ河内堤ヲ築カ
シメラルト云々

本多三弥正重 神君ノ復仕ス是人ハ譜代ノ

臣トシテ軍功ヲ励スト云々トモ永祿六癸亥年
一向宗ノ徒蜂起ノ時正重其棟梁タルヲ以テ翌
年参列ヲ退ソキ惣列ニ赴キ滝川一益ニ仕ヘ其

後前田利家ニ属シ或蒲生氏郷ニ倚頼ス三家ニ
於テ銳武ノ譽淺カラスシテ遂ニ恩許ヲ蒙ル
取ナリ本多佐渡守正一ノ命ヲ奉ル信カ弟ナリ

二月大

三日 秀吉取旁ニ依テ候伯以下日々伏見ニ
登營ス

三月大

七日 秀吉病懣快驗諸人參賀ス

四月小

四日 畿内雪降テ冷ナル一玄冬ノ如シ

二十七日

秀吉土佐侍従元親カ亭へ奉臨
神君及施薬院伴食ト云々路次ノ衛士六百餘人

五月大

八日 神君正二位ニ叙シ内大臣ニ任シ玉フ

松平源次郎家業従五位下和泉守ニ任叙ス此時
ニ至テ御家ニ於テ侍従二人五位十八人ニ及ハ

十一日

神君御参 内是内府轉任并賀ノ為
ナリ

十三日 秀吉稚子拾九四時ヲシテ 龍顏ヲ
拜サシメントテ 神君以下列候ヲ携へ 朝奏
セラル秀吉父子 神君ハ牛車ヲ用ヒラル拾九
ヲハ其輔相前田黃門利家挾抱シテ日車大納言
ノ諸候ハ塗樂參議中少將ハ騎馬ト云々拾九從
二位權中納言ニ任叙アリテ諱ヲ秀頼ト稱ス干
眩 神君ノ隨身ハ永井右近大夫直勝松平右千
門大夫正綱内友右京進守成豊嶋主膳信滿ト云
二十五日 江府ニ於テ 御當家ノ功臣渡辺

新左衛門政綱 初稱半 十帝 享年五十三二テ卒ス

六月小

二十日 神君ノ附庸野分下館城主水谷兵部
大輔正村入道蟠龍窟全珍卒ス享年七十六七

田七月小

十二日 夜子ノ刻五畿内大地震 神社仏閣
大衆臣宅悉ク敗壞シ伏見ノ城中殿舎顛倒シ土
裂水涌出ス上臈女房七十三人奴婢五百余人厩
死ス秀吉漸ク履殿ノ庭ニ出政所松丸ノ方ト瓦
ニ死ヲ道レ玉フ子時加友全計及清正ハ石田カ

諺ニ依テ塾居スル処歩卒二百人ニ捧ヲ持セ城
内ニ入寢室ノ庭上ニ臨テハ秀吉白列自列ニ屍凡ヲ
引セ女服ヲ着シ覆面メイ居セラシ尼孝病全傍
ニ躄踞ス政取清正カ疾来ヲ悦ンテ孝病全ヲ以
テ恩言ヲ垂玉フ清正カ日微臣カ朝鮮ノ戦切ニ
放テ孰カ是ヲ争フ者アラシヤ然ルニ飯朝ノ後
石田小西カ讒間ユヘ今ニ孫弼スルコトヲ得ス
其故臣トモ今夜難カ君ノ危難ヲ救ハントスル
者アルヤト紅涙ヲ垂テ大ニ恨メリ秀吉敢テ其
詞ナシ 神君ノ櫓門顛倒メ加々凡隼人政尚歷

死ス致舎最モ大破セシム

十三日 神君早朝ニ伏見本城へ御登宮庭上

ニテ秀吉へ御對顔アリテ 禁裏へ御使ヲ献セ

ラレ然ルヘキ由 仰セケレハ秀吉耳心セラレ

貴客トヒニ上京シ 天橋ヲ伺フヘシトテ

神君トヒニ步行シテ出京シ玉フ時ニ 徒川ノ

御家人ノミニテ秀吉ノ扈從微ニシテナキニ均

之稻荷藤ノ森ノ辺ニテ 神君ノ御袖ヲ御家人

等是ヲ引コト三度ニ及フ突ニ秀吉ヲ殺シ玉ハ

ンコト此辰ニアリト欲シテナリ然ルニ一度モ

後ヲ顧視玉フコトナシ秀吉久シクシテ歩行之
大ニ勞タルト稱シ帶スルコヲ取テ其臣下ニ持
セ玉ハルヘシト 神君ニ渡サレ幻御手ニ携ヘ
テレ既ニ二三歩ニ及フ時類リニ秀吉辞退アル
ニ依テ彼コヲ井伊兵部女補直政ニ渡サレ然ラ
シテ秀吉ノ從士遂ニ余多馳着秀吉本多中務太
輔忠勝ヲ呼ンテ 徳川殿ハ天下ノ黑白分明ノ
名將ニシテ率爾ノ働キナキコト吾能知ル取テ
リ今日コヲ汝ニ持セント欲ス是汝弱年ヨリ忠臣
勇士ノ名アルニ依テナリ然ルニ 徳川殿コヲ

直政ニ渡シ玉フ汝サソ齒痒ク思フヘシ小気者
哉ト笑玉フ忠勝赤面シテ是ヲ謝スト云ヘ秀吉
叅 内ノ後洛外東山ノ大仏殿ニ指^詣シ其像ノ破
裂シ其驗ナキヲ怒リ矢ヲ発シ是ヲ射玉フ伏見
ニ飯テ加友清正ニ對顔寵遇昔日ノ如シ

二十日 秀吉大地震ヲ恐レ其難薄カラシメ
トヲ欲シ本丸ヲ木幡山ニ移シ築カシメ今日亥
始アリ殿閣ノ柱ニ命ニハ石礎三分一ハ土中ヘ
其根ヲ五尺堀入ヘキ旨下知セラレ極月晦日ヲ
限リ新營ニ移徒アルヘキ間馬廻ノ健士小身ノ

族中間等マテ組々シ分ツテ夜以テ日ニ繼テ經
營ノ切ヲ勵スヘシト云々蓋シ応仁文明以來數
百年兵革連綿シテ漸ク天正十八九西年ノ間ニ
東奥ノ端マテ一統ニ平均シ海内枕ヲ泰山ノ安
ニ措ントスル処又朝鮮征伐記テ士民大ニ苦シ
ム中ニ割伏見西度ノ營構ニ困窮シテ悉ク豊臣
氏ノ亡ニコトラノ虞哉セサル者ナク人望自然ニ
神君ニ皈スト云々

八月大

二十九日 大明朝鮮和好ノ使伏見ニ到着

ス

是月 甲斐庄喜右衛門正治享年六十三歳ニ
シテ卒ス往年本国河内ヨリ乱ヲ避テ濱松ニ来
リ 神君ニ仕フ實ニ杓河内判官正成カ末流ト
云々

九月小

朔日 大明ノ再使伏見ノ城ニ登リ秀吉ノ謁

ス

二日 秀吉明使ヲ饗宴アリ上擅ヲ秀吉ノ坐
トシ下擅右ノ方再使ノ席トシ左ノ方ニ 神君

元利家等納言以上總テ七将ノ坐ヲ設ク夏終テ
二使客館ニ歸ル秀吉花園ノ亭ニ入兼亮三永
哲ノ三長老ヲシテ大明ノ詔書ヲ讀ニテ其日本
ノ国王ニ封スルト云フ詞ヲ怒リ初小西行长大
明帝吾ヲ以テ明朝ノ王ニ封スヘシト堅ク答フ
ル卦ヲ述ルユハ朝鮮在陳ノ人衆ヲ輒ク飯朝ア
ラシムル処今詔書如斯是小西吾ヲ欺ケリ朝鮮
ノ和義丈ノ許容スヘカラサル旨加友清正及三
奉行ニ命シ清正ヲ始鎮西四国ノ大小名再ヒ朝
鮮ニ責入ヘキ由ヲ諭サレ明朝ノ冊使朝鮮ノ二

使名追班サル

八日 土列葛木濱へ蜜船漂着ス是ハ延須蜜
ハ高賞ノ為ニ渡海スル所逆風ニ隔ニテ撞折棧
搦ケ水ニ渴シ且餓テ五百余人死没シ残ル者三
百人ニ足ズ同至長曾我部元親精米五十俵酒肉
ヲ贈リ水ヲ授ケ船中ヲ愛育シ輕翰ヲ大坂ニ馳
テ此ヲ達ス秀吉刈増田右衛門尉長盛ヲ輕舩
ニ乗シメ土列ニ遣シ玉フ
二十日 長盛土佐ノ湊ニ於テ蜜舩ノ中ヲ點
撿シ其アル取縹子五万端金襴純子五万端白糸

十六万斤印子千五百兩木綿二十六万端麝香一
箇生麝香十匹生猿十五匹鴟鵂二羽是ヲ收メ取
テ舩百五十艘ニ送シ大坂へ運送ス蜜夷ニハ精
米千俵酒肉雜品若干ヲ授リ

是月 長壽山園城寺ヲ秀吉ヨリ 粟科ニ行ハ
ル族カ家助ヲ討ムルユヘ秀吉忿怒不憚シテ其
僧徒ヲ放逐シ寺領ヲ勘落セラル彼寺ニ秀郷朝
臣口納ムル鐘近來撞ケトモ鳴ス此凶ヲ示ス歟ノ
由卷説アリ

十月大

六日 土引ヨリノ廻舩大坂ニ着岸ニ蜜船没
收ノ品々秀吉ノ府庫ニ入ル処 禁羽及公卿致
上人且 神君等ノ諸將ニ配分アリ蜜船堅三十
間横二十二間八帆ノ挫風ニ折テ残ル所三抱余
ナリ秀吉下知セラレ舩悉ク修補ス 翌八月舩
帆スト云

十日 秀吉木幡山ノ本丸造畢ス

十一月小

三日 蒲生秀行カ臣蒲生四郎兵衛安 本氏
赤座
其政ヲ執ヘキ旨石田三成カ謀ニ依テ秀吉ヨ

リ印章ヲ授ケラレ

牧野新次郎庭成從五位下ニ叙シ讃岐守ニ任

又故山城守定成カ子
ニメ右馬允ト諱口シ

十二月大

五日 神君ノ部將久野民部大輔宗秀ト三宅

弥次共イ正次遺恨ヲ會ルコトアリテ團練之共

ニ死セズ宗秀采邑一万三千石正次カ食邑三千

石是ヲ没収セラル然ルニ宗秀カ父三郎左門

宗能入道宗安老後ノ怨歎其沈倫ヲ憐ニテ下總

ノ内ニテ懸命ノ地千石ヲ賜フ

二十七日

設樂哉中守貞通初孫甚享年六十、

三宅ニシテ卒ス其子市左門貞信三郎祿勤仕ス

晦日 鈞命ニ依テ松平丹波守康長カ娘十四時

片戸田采女氏鐵左門一西カ方ノ嫁娶ス康長カ

ノ采地武列東方ヨリ去年江府ニ
来リ留ニ神君ノ拜謁スト云ハ

是月 御家人神保惣右門政長卒ス

是年 下野ノ宇都宮三郎左門友原国綱実

子ナキユノ宗徒ノ臣十人上京ニ浅野正次弼

長政カ廢子采女長次ヲ以テ嗣子トセシコトヲ

奉行中ノ願望ス時ニ国綱カ弟芳賀左門兼々

十士ト不快タルユハ私ニ上洛シ古例ヲ述テ芳
賀ノ家ヨリ因綱カ糧子ヲ立ヘシ長政ノ末子ヲ
家督トセシコトハ因綱カ欲スル所ニ非スレテ
長臣等カ僭上ニ出ル由ヲ辨ヘケレハ秀吉ハ宇
都宮ノ本家豊前ノ城井屋形常陸公朝房天正十
六戊子年ニ亡タル時ヨリ其東国ニ散在スル采
邑皆因綱押領シテ今ニ其コトヲ達セサルコト
ヲ憎マレケレハ總ト芳賀カ申ス事ヲ許容セラ
レ右ノ十人ヲ芳賀ニ錫リ罷スヘキ由密々ニ命
セラレ芳賀愚ニシテ是ヲ容テス大ニ歡シテ十

人ノ内六人ヲ鶴命ト稱シ洛ニ於テ是ヲ誅シ野
刈ニ飯テ残ル四臣ヲ害セシムルノミナラス其
輩カ米地残ラス押領ス斯テ秀吉ハ淺野長政ヲ
以テ因綱カ常陸下野兩國ニ於テ十八万石ト書
出セシ領分ヲ檢地セラル所ニ三十万石ニ余レ
リ爰ニ於テ因綱カ僭上押領ノ罪ヲ稱シ備前ノ
國ハ配流シテ其領知悉ク收公セラレ曩祖宗圓
座主還俗シテ宇都宮ノ家ヲ興メヨリ當因綱ニ
至テ二十一世ニシテ断絶セシムト云々
秀吉ノ命ニ依テ會津ノ大守蒲生藤三命秀行

初代鶴ヲ以テ神君ノ尊トセラル

植村土佐守泰忠カ子帯刀康勝今年十九光始
テ神君ノ拜謁ス

松平右京亮康親ヲ召テ 釣命アリテ曰大番
次ハ先鋒ノ任タルヲ以テ有功ノ士ヲ撰シテ是
ヲ掌ラシム當時其一負ヲ嗣ク汝ハ吾家族ニシ
テ有司タラシムヘカラスト云ヘトモ其番ニ當
ル一彼役ヲ勉メ懈ルヘカラサル由 御説ラ蒙
フリ康親拜謝シテ是ヲ勤仕ス

池田三左衛門輝政カ弟備中守長吉カ嫡男治

兵多長奉下脱
九光

神君元 台従公ニ拜謁ス

台従公ヨリ新友五国光ノ服差ヲ賜フ後備中守
ト稱ス

松平主殿助家忠カ嫡子又八郎 台従公ノ御

前ニ於テ首服ヲ加フ御諱ノ一字ヲ賜リ忠利ト

稱ス且雲次ノ口ヲ授ケラル後任主
殿及

石川日向守家成カ嗣子宗十郎モ口脱ニ元服

乙御諱字ヲ拜受シ忠總ト稱ス実ハ大久保相模

守忠隣カ次男ニテ家成カ外孫之後任主
殿及

東奥松前ノ領主蛸崎伊豆守慶廣其子若狭守

盛廣始テ 神君ヲ拜謁ス後松前ヲ以
テ家号トス

抄原四郎兵衛正次卿家人ニ列ス後年天下統一統ニテ正次

カ旧版伊列氣多郡八代村ニテ千石ヲ与テラル

友方平九郎抄列ノ御家人ト成テ下總須賀保

村五百石ヲ賜フ

輕率ノ隊長表川金右ノ門氏俊取方ニ依テ致

仕ス其与力六騎後日心五十人ヲ以テ嫡子氏信

ニ預ケラル氏信モ又金右ノ門ト稱ス此取十八才

大卿番松平石見守康安力組三雲新左ノ門成

時ニ俸米五百俵ヲ賜フ

信列ノ佳士大井小兵ノカ子河内吉長入道滿

雪且江列甲賀ノ産西尾猪兵ノ正茂トモニ御家人ニ列ス

内田新六郎正成カ子平左ノ門正世卿扈從ニ列ス

木曾茂仲十八世千次郎或稱其叔父小笠

原内藏助ヲ憎メルコト有テ家臣千村山村ニ告

テ殺サシム時ニ山村甚兵ノ良勝初太刀千村平

右ノ門良重ニノ太刀ヲ撃ト云々且兒小性衆尸

リトテ牛割ニスルコト台聽ニ達シ木曾カ取

領ヲ没収セラレ遂ニ茂就邊鄙ニ憂死ス其弟ニ

人長次郎茂春与三次茂通卜称ス皆武田信玄カ
外孫ナリ茂春ハ後年難波ノ役秀頼ニ属スト云

慶長二丁酉年

正月小

元日 神君伏見ノ宮中へ群臣参賀ス遠列秋
葉郡叡照山平福寺薬師如来へ御願書ヲ納メテ
儿是 御自筆ト云々其紙表左ノ如シ

息災長久

心中所願

眼病平愈

右於成就者堂建立可仕者也

慶長二年

正月吉日

内大臣家康

射賀仁東於照須御威光誓言伊於吾礼承讓

利玉江屋

二月大

五日 渥美太高兵予友吉卒其父友久ハ今

以存生ナリ友吉カ子友景毎太高ハ 台徳公ニ

仕一後年紀陽大納言頼宣ハニ 附屬セラレ友景カ子

ハ太高兵予ト稱シ曾祖父ノ諱ヲ
唱ニ友久ト号シ御當家ニ勤仕ス

十三日 杉浦友次高時勝力ニ男善十高善成

後改吉
右ノ門 武列都筑郡鴨志田村二百石ヲ賜フ

是月 秀吉再ニ其兵十四万余ヲ以テ朝鮮ヲ

撃シム

三月小

朔日 宇都宮國綱朝鮮ニ於テ功ヲ顕サハ食

邑ヲ賜フキ由秀吉ノ命ニ依テ騎士八十六人

雜兵五百十三人ヲ率テ渡海ス

毛利參議輝元權中納言ニ轉任ス

十日ノ二字恐クハ
脱ス

右於成就者堂建立可仕者也

慶長二年

正月吉日

内大臣家康

射賀仁東於照須 御威光誓言伊於吾礼仁讓

利玉江屋

二月大

五日 渥美太高兵予友吉卒ス其父友久ハ今

以存生ナリ友吉カ子友景 友太高ハ 台徳公ニ

仕一後年紀陽大納言頼宣ハニ 附属セラルル 友景カ子

ハ太高兵予ト稱シ曾祖父ノ諱ヲ 唱ニ友久ト号シ御高家ニ勤仕ス

十三日 杉浦友次高時勝力ニ男善十高善成

後段吉 右行門 武列都筑郡鴨志田村二百石ヲ賜フ

是月 秀吉再ヒ其兵十四万余ヲ以テ朝鮮ヲ

撃シム

三月小

朔日 宇都宮国細朝鮮ニ於テ功ヲ顕サハ食

邑ヲ賜フヘキ由秀吉ノ命ニ依テ騎士八十六人

雜兵五百十三人ヲ率テ渡海ス

毛利參議輝元權中納言ニ轉任ス

四月大

武列上列ノ盜賊其張本十三人上列飯塚ノ一
屋ニ取籠リ兵器ヲ以テ拒ントス那須ノ城主松
平和泉守家乗カ弟左近莫次時ニ二十二才躬ツ
カラ進ンテ家内ニ込入忽一人ヲ突伏一人ヲ搦
捕從者續テ競ヒ撃テ或ハ殺シ或ハ捕ユルコト
總テ十人ト云々僅一人逃

二十九日 御家人山中庄大夫助行初孫卒ス

六月小

二日 渥美太帛兵ノ友久入道享年七十一歳

ニシテ卒ス元物列ノ產又傷シテ尾列ニ至リ
神君實子トシテ摺田ノ加友圖書順盛カ宅ニ寓
居シ玉フ時ヨリ志ヲ竭シ且軍功アリ

十二日 前筑前ノ牧權中納言從三位兼行左
行門督大立朝臣隆景逝去享年六十二才ナリ是
ハ十三列ノ大守毛利大膳大夫兼陸奥守元就ノ
三男ニシテ小早川氏ノ跡ヲ嗣テ武畧雄謀ノ稱
アリ考吉九列ヲ征シ筑前ノ国ヲ封ス隆景恩賜
ノ任重キヲ辞シテ大政所ノ兄木下肥後守家定
カ廢子考秋ヲ以テ嗣子トシ彼国ヲ讓ル考秋ハ
行門督

任中納言ニ轉ス爰ヲ以テ
世ニ秀秋ヲ金吾黃門ト云フ

二十三日 夏列下田ノ城至戸田三郎右衛門
忠次卒ス 享年六十七

七月大

十日 台從公ヨリ尚部山城守利直ニ尊簡ヲ
授ニ鞞吐鐘五ヲ贈リ玉フ

十五日 朝鮮國唐嶋ニテ秀吉人水軍服坂中
勢少捕安治戰功ヲ勵スコトヲ賞シ 神君ヨリ

台簡ヲ投セラレ
十八日 去秋洛陽ノ大仏殿大地震ニ破裂シ

秀吉怒テ重テ仏閣ヲ造宮ニ信列善光寺如來ノ
像ヲ大佛ニ代テ安置セシメ今日彼如來ノ
像上京アリト云々

是日 西江彈正左衛門家貞享年四十二
メ卒ス嫡子孫九郎忠貞負體禊ト云々

二十八日 備後鞆ニ於テ前征夷大將軍從二
位守權大納言源朝臣美昭卿逝去 于天陽院 一

其子二人往昔織田信長是ヲ秋門ニ入シム圓滿
院ニ尊實相院常尊是ナリ

八月小

八日 前ノ武列鉢形ノ城主北條安房守氏邦
於加列蟄居ス

九月大

加賀中將利長參錢ニ任ヒ從三位ニ叙ス

十月小

二日 永井安右ノ門尚家卒ス是留ニ參陽大

後邊祖税ノ一ヲ司トルト云々其子新八郎ハ當

吹園東ノ内貢税ヲ沙汰ス

十二月小

三日 秀吉德善院玄叡ニ命ヒテ江州ハ

帝都ノ近境然モ一揆蜂起スヘキ地タルヲ以テ
彼國ノ旧城ヲ破却セラレ

十二日 武陽ニ於テ 台徳公指毛ノ邑ニ放

鷹セラレ所ニ疱瘡ヲ患ヘ玉フ則老臣羽書ヲ伏

見ニ奏ス

十七日 江府ノ羽檄伏見ニ至ル 神君永井

弥右ノ門白元後取監物ヲ以テ 台徳公ノ病懣ヲ訊

玉フ白元即日伏見ヲ奏ス

二十日 永井白元晝夜四日ニシテ武江ニ着

シ 台徳公ノ御前ニ於テ 釣命ヲ演ル其速ニ

未着スルコトヲ感シ時服ヲ賜リ伏見ニ飯ニ玉
フ大久保治部大輔忠隣ノ御旨ヲ傳達ス
二十五日 永井白元伏見ニ歸リ 台従公痘
瘡段々清快ニ卦キ玉フ由言上ス 神君モ其往
来ノ速カナルコトヲ感セラル

二十七日 御當家草創ノ功臣上列白井城主
本多豊後守茂原廣孝享年七十也ニノ卒ス

是年 台従公ノ姫君誕生シ玉フ酒井河内守
重忠墓目ノ役タリ成長ノ後豊臣ノ秀頼ニ嫁シ
被生害以後本多中務大輔忠利ノ室タリ忠利没

後薙髮シテ江城北ノ丸ニ住居シ玉フ天樹院殿
是ナリ

神君ノ御外孫奥平忠七齋忠政ヲ以テ上列吉
井ノ邑主管沼大膳亮定利始稱小大膳カ娘嗣トシテ
万石ヲ與奪ス後濃列加納ノ城ヲ賜リ松平横津
守ト稱スルハ此忠七齋ト云ハ

山中修理亮重政カ子熊丸重信僅ニ八考ニノ
台従公ニ拜謁シ 仰ニ依テ長次齋ト改ム 後伊豆守
ニ仕ス

勢州ノ浪客保々長兵ヲ刻貞當時加友清正カ

臣加友百助忠就カ許ニ賓客ノ寄食スル処建田
小平治長興執達ヲ以テ 神君御家人ニ列シ采
地千石ヲ賜フ

甲陽武田典厩信豊カ曰臣青木尾張信治カ養
子清左ノ門御家人ニ列ス實ハ落合常陸
カ次子ナリ

江列勢田ニ於テ青木木二右ノ門ト云フ士父
ノ雛日苗左京ヲ擊捕テ時御家人美濃部清洲之
助茂朝カ子勅三節茂次荷擔ノ科ヲ五奉行ヨリ
御當家ノ老臣ニ断リ誅セラルヘキ旨ヲ述ル
神君密旨アリテ茂次所々ニ隠シ其罪ヲ遁ル

伏見ニ於テ御家人高橋金七節ト大谷刑部少
辨吉隆カ節從圖諱ス干乾安友治右ノ門定次カ
三男也左ノ門一勝助太カノ大谷カ士ヲ斬ラシ
メ逐電ニ逐ニ安友ハ前田利長ノ家ニ仕ヘ元和
難波ノ役ニ軍功アリ

越前考康以ノ二男虎松生ル 後稱伊与
守忠昌

總列相馬ノ邑至土岐山城守源定政享年四十
七也ニノ卒ス是ハ菅沼友藏ト稱シ知ヨリ

神君ニ仕ヘ勲功ノ臣ニ其子井五節定茂 後任山
城守
家督ヲ嗣テ一万石ヲ領スト云々

二、三、

臣加茂百助忠就カ許ニ賓客ノ寄食スル処建田
小平治長興執達ヲ以テ 神君御家人ニ列シ采
地千石ヲ賜フ

甲陽武田典厩信豊カ曰 臣青木尾張信治カ養
子清左ノ門御家人ニ列ス 實ハ落合常陸
カ次子ナリ

江列勢田ニ於テ青木木二右ノ門ト云フ士父
ノ雛口苗左京ヲ擊捕テ時御家人美濃部清洲之
助茂朝カ子勅三節茂次荷擔ノ科ヲ五奉行ヨリ
御當家ノ老臣ニ断リ誅セラルヘキ旨ヲ述ル
神君密旨アリテ茂次所々ニ隠シ其罪ヲ遁ル

伏見ニ於テ御家人高橋金七節ト大谷刑部少
辨吉隆カ節從圖諱ス干眩安友治右ノ門定次カ
三男也左ノ門一勝助太カノ大谷カ士ヲ斬ラシ
メ逐電シ逐ニ安友ハ前田利長ノ家ニ仕ヘ元和
難波ノ役ニ軍功アリ

越前考康以ノ二男虎松生ル 後稱伊与
守忠昌

總列相馬ノ邑至土岐山城守源定政享年四十
七也ニノ卒ス是ハ菅沼友藏ト稱シ幼ヨリ

神君ニ仕ヘ勲功ノ臣ニ其子井五節定茂 後任山
城守
家督ヲ嗣テ一万石ヲ領

三三三

宮へ詣し玉ヲ今夜於武江御家人米津清右衛門
清勝カ婢女一首ノ倭哥ヲ夢ん

盛リテル都ノ花ハ散果テ吾妻ノ松ノ世ヲ

ハ継ケル

七日 畿内大雪降ル

九日 秀吉蒲生家ヲ再ヒ憎ムルコト有テ友

三節秀行ノ領知奥列ノ内二十郡羽列長井二郡

總高九十一万九千石ヲ放テ野列宇都宮新檢地

高十八万石余ヲ授ケラレ

二十四日 秀吉ヨリ上杉中納言景勝カ旧領

越後一田元信列川中嶋田郡ヲ將シ奥列ノ内三

十余郡羽列長井二郡元先知佐渡一田羽列庄内

三郡トモニ總テ百三十一万八千石余ヲ賜ハリ

會津ニ在城ス堀久太帝秀治哉前北庄二十九万

八百石ヲ將シ其附庸溝口村上トモニ越後一田

ヲ賜リ後五位下ニ叙シ侍從ニ任ス其臣貞友織

部正重勝一万石ヲ賜ハリ秀吉ノ直勤ス或ハ三月二十

四日ト云々

晦日 遠列久野城至松下石見守之綱享年六

十二歳ニシテ卒ス去諱長多是ハ若狭守長列カ子ニ

テ始加兵キト稱シ秀吉弱年ノ時ノ主人ナリ
是月 伏見ニ於テ堀久太郎宅失火シ岐阜黃
門秀信ノ館類焼シ丹後少將忠興ノ營危シ干時
加賀利家ハ衰老ト云ヘトモ躬ツカラ三千余人
ヲ率テ馳至リ細川ノ宅焼ルトキハ余煙城下ノ
殿舎ニ及ハント案シ自身屋上ニ登リ從者粉骨
ヲ竭シ火ヲ鎮ム

三月大

十五日 秀吉洛陽醜翻ニ遊テ花ノ宴ヲ催シ
玉フ今日前ノ江向ノ領主佐々木六角彈正女衛

源茂賢入道拔園斎兼禎流牢憂死ス

四月小

二十日 加賀黃門利家從二位ニ叙シ大納言

三任ス

下旬 秀吉ハ石田治部女補三成ヲ召テ吾朝
鮮ノ軍ニ倦シ閑ユトヲ厭フ汝肥前名古屋ニ下
リ軍衰ヲ沙汰スヘキ旨命セラル三成堅ク辞ス
トモ許容ナシ三成遂ニ領掌ニ退出ノ後長束
大藏大將大谷刑部少補カ方ニ卦キ予筑紫ニ至
ラハ其跡ニテ讒間ニ陥ルヘシ深ク慮テ其罪ヲ

償に賜ルべしト云ハ

五月大

三日 秀吉朝鮮在陳ノ加友左馬助嘉明カ功

ヲ賞シ三万七千石加恩セラルト云ハ

五日 端午ノ出仕畢リ秀吉病ニ嬰リテヲ養

安院脉ヲ伺ヒ平脉ト甚タ異ナル間衆醫ノ了簡

ヲ問レハキ旨ヲ述テ藥ヲ欽ス洛ヨリ召ニ忘レ

夜中ニ通仙院施藥院竹田法印馳至テ病射ヲ窺

ヒ其謂フ所符合ス

七日 秀吉取劣甚タ重シ昨夜中マテ養安院

茶ヲ服用セラル其効驗更ニナキユハ養安院衆

醫ト啗議シテ晝夜加減ノ茶ヲ進ム

八日 秀吉竹田法印カ茶ヲ服用ト云ハ

十一日 石田三成出京ノ鎮西ニ赴ク

二十二日 秀吉洛陽大佛殿再興供養ヲ遂行

ル

下旬 秀吉病惱益甚シ最モ虚損ノ症ト云ハ

六月小

二日 衆醫群衆シテ秀吉ノ脉ヲ窺ヒ療藥

及ヒカタシト云ハ

十六日 秀吉逐日肉脱し飯食減ノ病創レ浅
野前田石田増田長束ノ五人ニ命シテ曰余等諸
候牧伯麾下ノ士ト多ク怨恨アリト此太不可
今ヨリ後ハ相互ニ恨ヲ忘シ歡ヲ結シテ相共ニ
秀頼ヲ保護シテ可ナリト五人其旨ヲ衆人ニ傳
フ衆皆曰心ヲ一ニシテ嗣君ヲ仰キ奉ルハ誰
カ異心ヲ存セシヤ然レトモ衆人私怨宿恨ハ各
存念アレハ命ニ從テ和平ハナルヘカラスト云
ニ秀吉因テ驚キ 神君ニ告テ曰 内府願クハ
衆人ヲ惕和シ玉ヘト於是 神君倭伯諸士ヲ會

シテ秀吉ノ命ヲ傳ヘ相共ニ和睦セシメラル衆
人肯ハス其對ルハ前ノ如クニシテ恨ヲ解ヘキ
氣色ナシ 神君曰諸君皆ニ太閤ノ命ヲ受テ心
ヲ一ニシ志ヲ盡シテ嗣君ニ仕ヘシト云キ志忠
ヲ盡シ公ヲ奉ニハ何ノ私ノ怨アラシヤ若尚互
ニ讎隙ヲナサハ此各異心アルナリ心ヲ一ニシ
テ志ヲ盡ス謂ニ非ス嗣君ヲ奉スルノ美安クニ
カ有ルヤ諸君ノ言何ソ前後相違スルヤトテ變
容ヲ劬諭シ玉フ衆人其理ニ服クシテ異言アルコ
ナク相共ニ對テ謹テ命ヲ奉ツラントス 神君

是ヲ報セラルル者吉大ニ悦ヒ於是讌會ヲ設テ候
伯諸士ヲ餐シテ共ニ文歡ヲ結ハシメ玉フ然レ
ヒ衆人ノ意更ニ解スシテ色ヲ和ケ詞ヲ交ル
ナシ 神君劔ヲ拵テ起立シ玉ヒ怒テ曰諸君何
ソ我ヲ欺ヤ留ニ諸君私ヲ忘レ公ヲ奉シテ嗣君
ヲ滿ケレト云ヘリ我其言ヲ報セリ故ニ太閤欣
喜シテ今日ノ歡會ヲ成シム今諸君飲酬歡和
態ナク脛肥忿争ノ氣アリ此諸君我ヲ太閤ニ賣
ナリ座中ノ人ハ皆吾敵ナリ神監上ニ在リ一人
ヲモ腕スマシト宣フ衆人其威信ニ服シテ滿座

寂然トシテ屈服ス時ニ中村一氏淺野長政前田
玄以進出テ調和シケレハ衆人俯伏シテ其眾ヲ

陳射ス

一日 夜ニ入嘉祥ノ祝アリ者吉ハ上段褥ノ
上ニ蒲團ヲ敷テ着座秀頼其傍ニ侍座セラレ其
下段中央ニ斤木ニ色々ノ菓子ヲ積シテ並ニ
此席ハ中老五奉行近習ノこ出座シテ是ヲ頂
戴ス其余每席皆如斯品々ノ菓子ヲ積置官職ノ
高下ニ依テ其席ヲ異ニシ皆菓子ヲ得テ退ク
恒例ノ如ク吉中老奉行ニ向テ曰吾願フ取ハ者

頼十五^七及ハ、海内ノ政ヲ讓ント欲スル
日アリ渠天下ヲ管領シ此嘉議ヲナス^一ヲ見ハ
吾本懐タラシ^一吾命既ニ竭^レトス遺恨寡カラス
トテ落涙アリ伺候ノ輩泣^シテ退ク其容貞^シ
見ル者秀吉薨逝カト稱シ親族朋友ニ告^シテ欲
シ京伏見大坂ノ間ニ使殆ト絡繹タ^ル故歟^一
刻伏見中大ニ躁動ス

十七日 秀吉 神君^ノ對顔^シ昨日 緒將和融
ノ時威嚴アル^一ヲ感セラ^ル
二十二日 宿ニ朝鮮ヨリ飯朝ノ大小名縞ヲ

執ル中ニモ毛利甲斐守秀元恩言ヲ蒙^リ今日
又藤堂佑渡守高虎カ軍功ヲ賞シ一^一万石増封セ
ラ^ル總テ八^一 昭坂中務少輔安治ニモ三^一千石加^一
賜^フ

フ

Faint, illegible text on the left page, possibly bleed-through from the reverse side.

Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

